

森林の博物館、鋸の博物館、 大工道具の博物館

佐々木 享

森林の博物館＝仁別森林博物館

この「博物館めぐり」は、私が実際に訪ねた博物館のなかで、特色があり、紹介する価値ありとおもわれる施設をとりあげている。したがって、私の行動の軌跡に左右され、いきおい、関東、中部地区に偏ってしまう。今回はほんの少し北の方へ足を伸ばしてみよう。

かつては盛んだった林業も、輸入材に押されるなどの事情で以前のおもかげは薄れた。こうしたなかで、「仁別森林博物館」は、林業の材料見本や工具類を、私の知る限り最もよく保存・展示している。

仁別森林博物館は、秋田杉で知られた秋田市の郊外、市といっても秋田駅から27kmの山の中にある(秋田市仁別務沢国有林内、Tel. 0188-27-2322)。森林業関係の資料を保存するために林野庁が設立した博物館で、秋田営林署が管理しており、秋田駅からクルマで50分程行った「仁別国民の森」の一隅にある。「国民の森」行きの市営バスは、土曜、日曜だけ運行している。休館日は毎週金曜日(ただし、金曜が祝日のときは開館する)。8月に私が訪ねた際には、博物館のすぐ裏手の草原に、数匹の野兎がたわむれていた。降雪のためにアンが不便になる関係で、開館するのは、毎年4月29日から翌年11月5日までと決められている。現地保存主義のたてまえからすると、これもやむを得ないのかも知れない。

入館すると、約500年前のものといわれる秋田杉をくりぬいて作った丸木船が目に入る。

1階は秋田杉を中心に樹皮からみた樹木の分類、森林の造成作業、林道、森の昆虫や野鳥、動物など、森林の世界を展示している。

充実していると感じたのは2階の展示である。ここには、仙夫と呼ばれたむかしの山林労働者の服装と装具、さまざまな形をしたそり、1920年頃からわが国で使われた自動鋸、さまざまな斧など、伐採に使われた種々な工具(刃物)類が、歴史的変遷にそってぎっしりと並べられている。白ろう病という職業病になる惧れがあるとさわがれたチェーンソーなるものも、私はここで初めて見た。数10種にのぼる外国で使われた伐採用具も展示されている。

展示物が多いのに建物にが小さ過ぎる感じだ。こんなに充実した森林博物館は他にないのだから、もう少し大きな建物にして、説明もつけてスペースに余裕をもたせればよいのに、という感想を禁じ得なかった。

建物の外には、森林鉄道のSL(実物)、集材機などが展示されている。

鋸の博物館＝ミュージアム氏家

博物館案内などで「鋸の博物館」を探しあてるとは、多分できない。それは、「ミュージアム氏家」の「鋸展示室」となっているからだ。ミュージアム氏家は、東北新幹線を宇都宮で在来線に乗り換え、北へ向かって3つ目の氏家で下車した栃木県氏家町にある。氏家駅から約1km、タクシーで5分程行った国道4号線沿いにある(Tel. 0286-82-7123)。以前は同じ4号線沿いにあった氏家町民俗資料館の中にあっただけけれども、同館は勝山城跡に移転、改装したのだ。

この例のように、近年は旧来の施設を移転したり改称したりしている場合が少なくないから、遠隔の地を訪ねる場合には事前に所在

地などを確かめておく必要がある。

ここくらい鋸を揃えているところは、私の知る限り他にはないからせめて一画を「鋸の博物館」といったらよさそうな気がするが、行政としてはそうはいかないのかも知れない。例は他にもある。収蔵、展示物の大部分が国の重要民俗資料として指定された陶器の生産用具類なのに、瀬戸市歴史民俗資料館(愛知県瀬戸市)を名乗っているのもその1例である。瀬戸の場合は、こういう名称にしないと国の補助を受けられなかったと聞いた。

ミュージアム氏は美術品の部屋や民具類も楽しいけれども、最大の魅力は『鋸』の著書もある吉川金次が集めた多数の鋸を展示している点にある。

鋸展示室には、古墳から出土したものから近代まで、およそわが国の多種多様な鋸が展示されている。大鋸、縦挽、横挽、東北、関東、関西、四国と地域毎に微妙に違う鋸、製材用の鋸、等々が約300種展示されている。そしてずらりと並んだ鋸の目立て道具。のこぎりの名前を並べても、使い方がわからなければ意味もないのでやめておく。鋸づくりの鍛冶場も再現されている。

後になって、ふとおもったことがある。たしかにここには鋸の歴史はある。しかし、ここにあるのは鋸(の歴史)のすべてではなく、木材についてのそれに限られていたということ。

大工道具の博物館＝竹中大工道具館

大工道具をよく揃え、充実しているという点では、この「竹中大工道具館」の右に出る博物館はない。この館は、上に紹介した施設とは違って、新幹線の新神戸で乗換えた地下鉄で2つ目、あるいは在来線の三宮(JR、阪急、阪神)で地下鉄に乗り換え、1つ目の「山手・県庁前」下車3分という交通至便の地にある(神戸市中央区中山手通4-18-25 Tel.078-242-0216)。創業1610年という歴史を誇る大手建設業者の竹中工務店が1984年に開設した博物館で、現在の経営主体は財団法人

人となっている。

3階建て、1階展示室は「道具の歴史」、2階展示室は「木と匠と道具」、3階は「道具と鍛冶」と題されている。

1階には、中央に五重塔のすばらしい模型を据え、壁面を中心に古代から現代に至る大工道具の歴史に関する展示がある。

2階には、建築と木、匠の技(日本建築の様式、木割＝設計、規矩、装飾、積算)、匠と道具(手仕事、作業方式)、木を組む(日本建築の構造、継手・仕口)、匠と祭式(上棟式など)、建築部材と樹木一覧、などが展示されている。

3階には、伐木・製材の道具、大工道具(墨掛道具、大工用の鋸、鉋、鋸、鉋、のこぎり、かんなど)、およそ古くから大工道具として用いられたほとんどすべてが、それぞれ数種から数10種展示されている。鋸の鍛冶道具、鍛冶仕事についての展示も興味深い。

館の名称からは大工道具だけの博物館という印象があるけれども、木材による和風建築に関する総合博物館といってよい。

この博物館の魅力の一つは、「大工道具の使い方」、「大工道具の作り方」、「木を組む(継手と仕口)」に関して数10本のビデオが作成されていることである。入館者はビデオのリストから選んで上映して見ることができる。1つの作業あるいはテーマごとに、どれも5分前後にまとめられている(「大工道具の作り方」シリーズはやや長い)。私も上映してみた。その道の熟練工が行う作業の要点を見せてくれるわけで、大変勉強になる。むかしの大工修業では、むつかしい作業はなかなか教えてもらえなかったというから、世の中も随分変わったものだ。教育用なら、頒布してもらってもできる。

とくにミュージアムショップというコーナーはないけれども、販売している『竹中大工道具館(展示解説)』は、大工道具の解説書としてもよくできている。